

群 教 ゼ	G07- 02
	平 14.208集

よりよい住まいの大発見！



■主 題 「快適な住まい方の指導の工夫」

— ワークショップを取り入れ

主体的に取り組むことができる児童をめざして —

■特別研修員 武藤 妙子 （甘楽町立小幡小学校）

■研究の概要 小学校家庭科「快適な住まい方」の単元において、主体的に判断しよりよい方法で問題を解決する資質や能力を育てるために、問題解決的な学習にワークショップを取り入れた。具体的には、「暖かさ・明るさ・風通し」などの身近な課題を解決するために、ワークショップを取り入れ主体的に課題解決活動を行うことができる児童をめざした。

■キーワード 【小学校 家庭科 快適な住まい方 問題解決的な学習 ワークショップ】

目指す児童像と基本的な考え方

本研究の「主体的に取り組む児童」とは、自分の生活を見つめ、「明るさ・暖かさ・風通し」などの課題に気付き、自分の思いや考えを持って課題に働きかけ、友だちや自分のよさを生かしながら、工夫や改善をしていける児童とした。

本研究は、小学校の家庭科「快適な住まい方」の単元に、自分の課題について話し合い、互いの発見や気付きを大切にしながら、解決策を探求していくワークショップを取り入れた。

いろいろな事柄に「なぜだろう」「どうすればよいだろう」と考えるようになってきているこの時期の児童は、論理的に物事を考えられるようになってきている。そのような児童に、問題解決的な学習の過程でワークショップを取り入れたワークを行うことは、友だちと協力して解決することの喜びや自分の思いや考えを相手に伝える喜びを実感しながら、主体的に課題を追究していくことができると考えた。

ワークショップ取り入れて

1 なぜ、ワークショップなのか

ワークショップは、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけでなく体や心を使って体験したり、相互に刺激しあい学びあう、グループによる学びと創造の方法である。また、共通理解を基盤とする話し合いを通して、考えを深める活動であるともいわれている。

「住」の領域の学習は、実践したことや体験したことが児童からあまり出てこない。これは、他の領域に比べ実践や体験的な学習が少なく、児童にとって、発見や作り上げた感動など心に残るものが少なかったからではないかと考えた。そこで、「住」の領域でも「衣・食」の作品や調理実習のように、自ら作り上げたという充実感をもたせたいと考え問題解決的な学習を行うことにした。しかし、与えられた課題について調べ、発表するだけでは、自ら作り上げた喜びや主体的に自らの生活を改善していこうという実践的な態度も身に付きにくいのではないと思われる。

そこで、ワークショップのよさである、友だちと自分の考えを提案しあい、課題をより明確

にしながら認めあい、課題を深め、自分たちで発表の場を企画して提案するファシリテータ(促進者)となる活動を行うことは、発達段階から見ても妥当であると考えた。

2 研究の構想

本研究では、課題解決的な活動の中に、小学校の児童でも無理なくワークショップを取り入れられるよう、つかみのワーク 感じて・考えて・創り出すワーク 伝える・深めるワーク 参加し・深めるワークの4つのワークを考えた。自分の課題について話し合い、互いの発見・気づきを大切にしながら、解決策を探求していく活動をワークとして行いワークショップの持つよさを問題解決的な学習に生かせるよう工夫した。このことにより、基本的な流れを論議する中で情報を共有し、体や心を使って体験したり刺激しあい、協力しながら話し合いによる解決を探ることで、だれもが安心して自分の考えを発展させていくことができる。

そして、考え出された解決方法が実現可能か、妥当かなど、結果について判断・評価をしあう活動の中でも個人の考え方を大切にできるので、家庭での実践活動を主体的に考えることができるようになっていくと考える。以上のことがらを表した構想図を図1として示す。

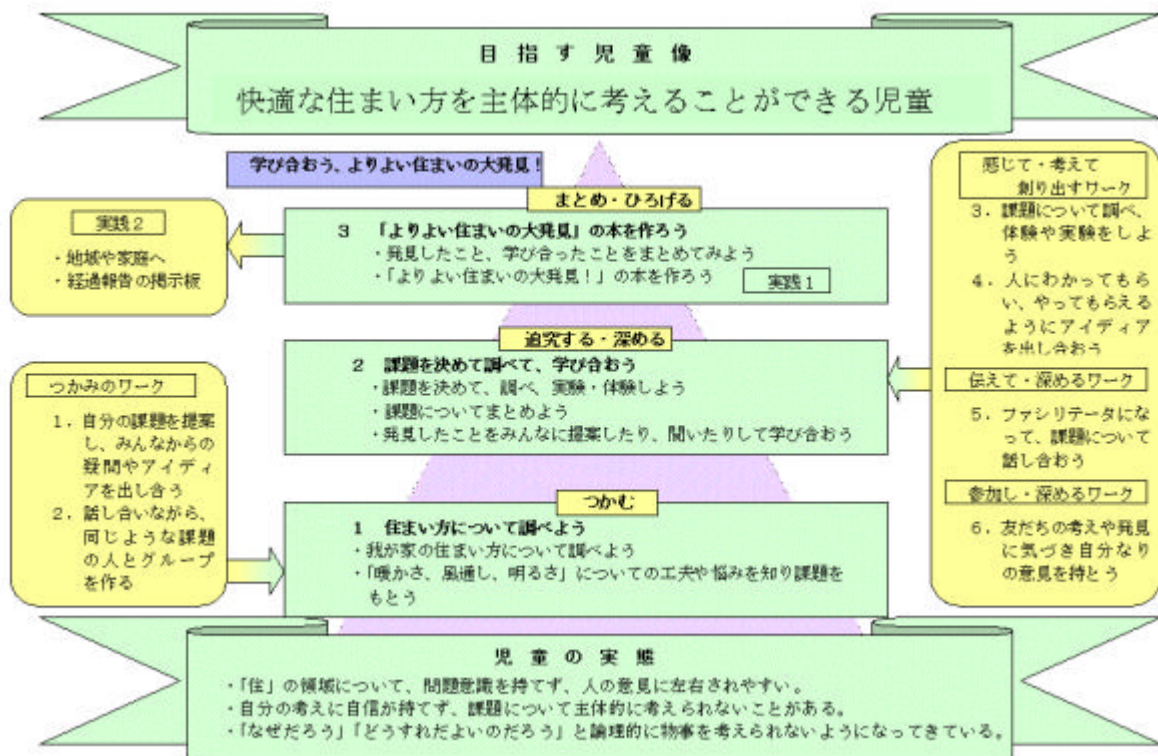


図1 研究の構想図

3 ワークショップの基本構造と本研究の関わり

ワークショップの大きな流れを「情報の共有化」「グループで提案作り」「提案評価」と考えた。考えを共有すること、課題を明確にし、認めあい体験をしながら課題を深め、自分たちの考えを提案し評価しあい実践へつなげていく活動を、小学生でも行いやすいようにワークとして行なえるよう考えた。

以上のことがらを表した、ワークショップの流れと本研究のワークとの関わりを次ページに図2として示す。

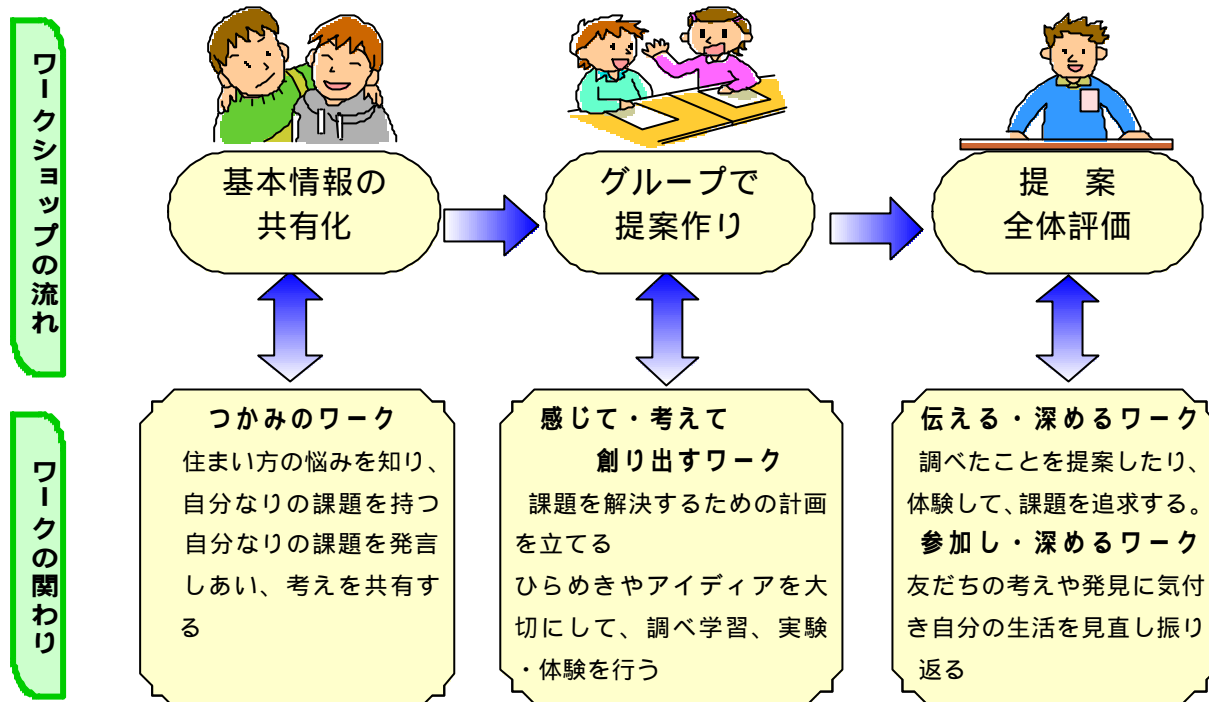


図2 ワークショップの流れと本研究のワークとの関わり

研究の目的

快適な住まい方の学習で4つのワークを行い、課題を主体的に論議したり、体験・実験を行い、相互に刺激しあったりすることは、主体的に考える力を高めるために有効であることを明らかにする。

研究の方法

問題解決的な学習の過程に以下のようなワークを行えば、学び方やものの考え方、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度、自ら課題を見つけようとする意欲などが身に付き、課題を主体的に考える力を育てることができると考え研究を行った。

1 つかみのワーク(基本情報の共有化)

- ・「自分の課題について話し合い、互いの発見や気づきを大切にしながら、解決策を探究していく活動」を行う。
- ・自分や周りの人の住まい方から、困っていることや工夫していることなどの課題を見つけ、お互いに発言したり、みんなの考え方を聞いたりする。このことにより、自分たちの調べることをはっきりさせ、課題を明確にする。

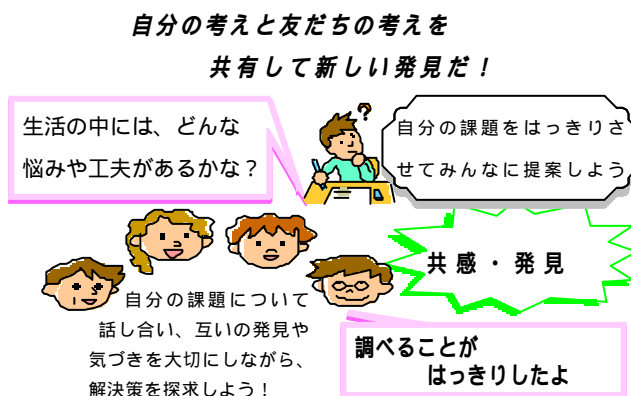


図3 つかみのワークのイメージ図

2 感じて・考えて・創り出すワーク（グループで提案作り）

- ・同じような課題や考えの友だちとグループを作り、考えを深め・広げあう活動を展開する。
- ・自分たちの課題について相談しながら、調べたり、体験や実験をしたり、いろいろな人に聞いたり、考えたりしながら問題解決的な学習を進める。
- ・自分たちの発見をいろいろな人に分かってもらったり、やってもらおうという気持ちを持つことで、アイデアを出しあい主体的に工夫していくことができる。

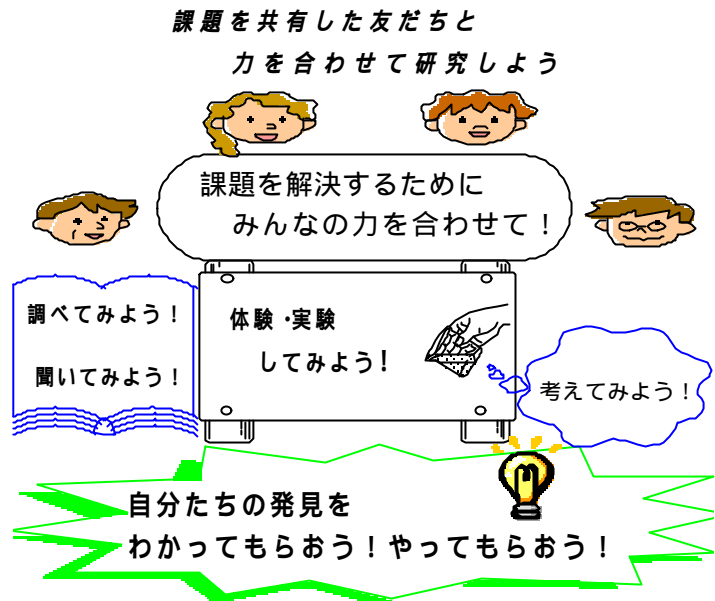


図4 感じて・考えて・創り出すワークのイメージ図

3 伝える・深めるワーク（提案）

- ・発表の場で、自分たちの調べたことをいろいろな人に伝えたり、自分たちの生活に生かしていけるようファシリテータ（促進者）となって提案し、みんなの意見を引き出す活動を行う。
- ・自分の課題について論理の練り上げができるとともに、他の人の意見を主体的に聞き取り、実生活への工夫と改善について考える意欲が高められる。

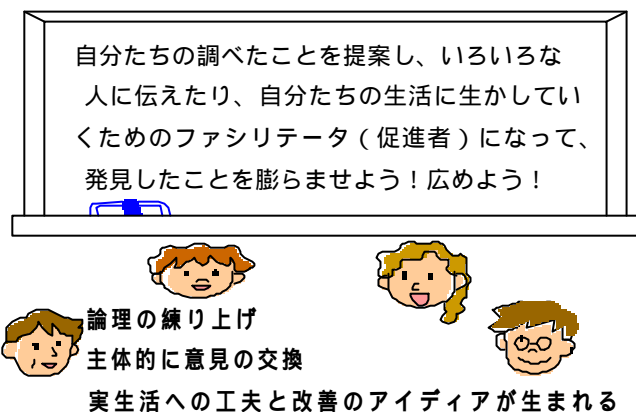


図5 伝える・深めるワークのイメージ図

4 参加し・深めるワーク（全体評価）

- ・友だちの提案を聞くことにより、友だちの考えや発見に気づき自分なりの意見を持つ。
- ・この活動により、もう一度自分の生活態度を見直し、生活の中の課題を自分のものとして振り返る機会が持てる。



図6 参加し・深めるワークのイメージ図

授業実践

- (1)題材 「よりよい住まいの大発見！」
 (2)対象 甘楽町立小幡小学校 6年竹組(24名)
 「深める過程」では、隣のクラスと合同で提案(ファシリテータ)と参加を交代で行う。
 (3)実践期間 平成14年10月下旬～11月下旬(14時間)
 (4)授業の概要

過程	学習の流れ・めあて	時間	指導の支援と配慮事項
つかかむ	- 暖かさ、風通し、明るさなどについて普段自分たちが過ごしている家庭や学校を例にして、工夫や悩みを見つける。 - いろいろな住まい方の悩みを知り、自分なりの課題を持ち、同じ課題を持った者で、グループを作る。 【つかみのワーク】	3	- 課題を絞りやすいように、暖かさ、風通し、明るさについて観点を絞る。普段行っていることを思い出しながら、工夫していること、困っていることを探せるよう支援する。 - テーマごとに話し合い活動を行う際、ワークショップを取り入れ、お互いに発言し、みんなの考え方を聞いて自分たちの調べことをはっきりさせながら、課題を明確にし、同じ課題を持った児童でグループを編成できるよう支援する。 - 振り返りの時間を取って、話し合いで感じたことを記録する。
追究する	- 自分たちの課題について発表を意識して、課題解決のための計画を立てる。 - ひらめきやアイディアを大切に、調べ学習、実験や体験を行う。 - 他の人に伝えることも意識して、方法や表現を工夫しながら、自分たちの課題を解決する。 【感じて・考えて・創り出すワーク】	5	- コーナーには、立体的な展示や実験などを取り入れたりして楽しく学びあえるよう工夫できるよう支援する。 - 実験を行う際、理科や算数の学習で学んだ事項(条件の設定や平均値)などを思い出して実践できるよう支援する。 - 児童のひらめきやアイディアが具体的に表現できるように、表現方法・表現技術などについて支援する。
深める	- 参加者と話し合いながら自分たちの課題をさらに追究していけるよう、自分たちで調べたことを提案したり体験したりして考えを深める。 【伝える・深めるワーク】 - 興味を持ったコーナーで、自分なりの疑問や考えを出しあい研修し友だちの考えや発見に気付く自分の生活を見直し振り返る。 【参加し・深めるワーク】	3	- 児童がファシリテータ(促進者)になって自分たちの発見を提案し、参加者の意見を引き出す活動を行えるよう援助や声掛けを行う。 - 発表するだけでなく、疑問やアイディアを出しあい実生活へつなげていけるような活動になるよう支援する。 - 友だちの提案を聞くときは、友だちの考えや発見に気付く自分なりの意見を持って参加するように配慮する。
まとめる	- 分かったこと、考えたことなどをまとめて、それぞれの課題についてまとめる。 「よりよい住まいの大発見」の本を作り家庭や地域に配布するようにする。	2	- 他の人の意見を主体的に聞き取り、実生活への工夫と改善について考えながら、本の作成に取り組むことができるよう働きかける。 - 生活でよりよい住まい方の実践ができるよう「よりよい住まいの大発見」の本を活用し、学習後も継続できるように働きかける。
ひろげる	「よりよい住まいの大発見」の冊子を活用して、学んだことを周りの人に知らせたり、試すにはどうすればよいか計画を立てる。	1	実践は家庭や地域で行い、その経過報告を発表できる場を用意する。

- (5) 評価計画 資料編を参照

授業実践での成果

1 つかみのワーク（情報の共有化）

生活の中から自分なりに工夫していることや困っていることを探し、調べてみたいことや考えたことをもとに、一人一人が課題を持ちつかみのワークに臨めるようにした。ここでは、ワークショップで大切にされている、「友だちと自分の課題について発言しあい、相手の思いを大切に聞き、課題についての考えを比較し共感しながら話し合いを深めよう」と投げかけたところ、子どもたちは自分の課題を発表するだけでなく自分の思いなどを入れた提案をした。図7は、児童が発言するために考える。このワークシートのように、ほとんどの児童がその子の生活の様子のがえる思いや悩みについて書いていた。

テーマ 風 通 し	・自分のしたいことを話そう ・友だちの考えを聞こう ・自分の課題について考えよう
(自分の考え)	
自分が取り組みたい課題・家の中の風通しをよくするにはどうしたらいいか ・家の中のしつけをとるためにはどうしたらいいか	
課題を解決するための方法やみんなに伝えたい考え 私は家の中の風通しについて言いたい。それは私の家は風通しがとても悪くてしきもしつけがあるから。それに夏は風がぜんぜん通らないのでとても暑くてせん風機でもつけないとなんかいいくないです。だから夏暑くて寝られない時は、お父さんの考えてこおってもやわらかいタイフのアイスノンを部屋の下に置いて寝ました。それにしつけはたくさんあって家の西側にある書庫の中はカビくさいにおいがします。しかも家の中のいろいろな物がカビやすくなって困っています。もしも悪くすれば家の中の木が腐ってしまう。私はこのような事を解決するために実家へお父さんとお母さんとおじいさんとおばあさんに相談してみようと思いました。その実家は家の周りの風向きも調べる実家です。その実家の内容はよく晴れた日に庭といろいろな方角の窓に風りんなど風がふいている向きが分かる物を置いてそれを1日監視してどの方向から風がふいてくるのか多いのかを調べて、その方向に窓がドアがあるのかを調べるというものです。この他にも、もしも実家方法があれば言ってみようと思います。	

図7 児童が発言するために考えをまとめたワークシート

ワークが進むにつれ、意見が同じ者や友だちの意見に共感した者でグループを作り始めた。今までは、いつも遊んでいる子や気のあう子同士でグループを作りがちだったが、自分の課題や考えに共感した者同士でグループを作ることができた。表1は、つかみのワークで決まった課題である。実践時期が季節の変わり目だったため、課題が均等に分かれたと思われる。また、「視力が悪いから、勉強するときの明るさについてやりたい」「夏熱くても、自分の部屋にはエアコンが入れてもらえないから風通しについてやりたい」など、生活の中で見つけた悩みから課題を考えることができた。

表1 つかみのワークで決まった課題

(全24名中)

明	掃除して明るい生活(2名)
る	電気を使わずに明るくする方法(4名)
さ	勉強に適している明るさ(3名)
暖	暖房機を使わずに暖かく過ごす方法(3名)
か	ホットカーペットの下に何を敷けば熱が逃げないか?(2名)
さ	部屋全体を暖かくする方法(4名)
風	窓を開けて涼しくするには、どうしたらよい?(3名)
通	湿気・ほこりをなくす風通しの良い部屋にするにはどうすればよい?(3名)

上記のように、自分の考えをはっきりさせることで、お互いに認め合い考えを発展させながら、「調べてみたい」「やってみたい」という気持ちがふくらんだ。

次の表2は、つかみのワーク後の振り返って書いた感想を要約してまとめたものである。

表2 ワーク後の感想の内容

(対象は24名、複数回答有り)

発言しての感想 早口になってしまった(3名) 緊張した(5名) 言いたいことが言えた(3名)	発言を聞いての感想 質問やアイデアが言えた(5名) 同じような考えの人がいてよかった(4名) 考えがまとまって良かった(2名) みんなの発言を聞いて参考になった(7名)
ワークについての感想 みんな一生懸命できた(1名) 楽しかった(1名) いろいろの意見が聞けて参考になった(7名) 話し合いながらいろいろ方法を考えた(2名)	今後のことについての感想 よく考えてから実験をしていきたい(1名) うまく調べられそう(2名) これからが楽しみ、頑張りたい(4名) しっかり考えたから実験が成功しそう(2名)

上記のようにワークについての感想には、「いろんな意見が聞けて参考になった」「話し合いながらいろいろ方法を考えた」など考えを深めながらワークに取り組めた様子が見える。また、提案を聞いて「同じような考えの人がいて良かった」などお互いの課題を共有化した安心感を伺える感想もあった。今後の活動について意欲的な感想を書いている児童も予想以上に、多かった。これは、ワークによって主体的に取り組もうという意識が高まったためである。

2 感じて・考えて・創り出すワーク(グループで提案作り)は、資料編を参照。

3 伝える・深めるワーク(提案)は、資料編を参照。

4 参加し・深めるワーク(全体評価)は、資料編を参照。

研究のまとめと今後の課題

本来子どもたちが持っている、知りたい・学びたいという気持ちを引き出すために、学習の過程にワークショップを取り入れたことで、よりよい人間関係を築きながら、安心して課題について考えていくことができた。そして、自らの課題を主体的に解決していこうとする活動につながった。特に、有効であったのは、つかみのワークであった。この段階で、これから取り組む課題について、相手の思いを聞き、さらに自分の考えと比較したり共鳴しながら課題について話し合うことは、子どもたちの取り組みを大きく変えた。

今回の指導要領の改訂により、小学校家庭科では、実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めることが重視されている。本研究を「住まい方」の学習で行ったことは、自分の住まい方に問題意識を持って生活していなかった児童に対しても、自分が生活している場である住まいについて見る目を変化させることができた。また、今回の学習により、節電など環境への意識も高まったので、今後は生活環境や近隣の人にも目を向け、生活の自立の基礎を培うことをめざしていきたい。

<参考文献>

- ・中野 民夫 著 『ワークショップ』 岩波新書(2002)
- ・早川 和子 著 『総合学習・問題解決能力をひきだす』 築地書館(2001)
- ・大島 愛子 金古 幸子 新福 祐子 浅見 雅子 共著 『住居領域の実験・実習』 家政教育社(1992)